

## うるま市地名散歩 ⑩

名嘉山 兼宏

# 東恩納 (ヒジャウンナ)

## 古くは「恩納村」

東恩納は、うるま市の北西に位置し、沖縄市や具志川方面から金武、仲泊方面を結ぶ交通の要地となっている。王国時代には中頭と国頭とを結ぶ東宿として番所が置かれた。戦前は街道沿いに商店や旅館も数軒あり、また昭和の30年代までは鍛冶屋もあつて宿場町的な雰囲気があつた。

東恩納は、古くは越来間切恩納村、美里間切恩納村と呼ばれていた。1673年、恩納間切の設立によって混同をさけるために東恩納と称されるようになったが『中山伝信録』(1721年・徐葆光)に「恩納亦東恩納、以別北山之恩納……」とあるようにしばらくの間は恩納村の恩納とともに「恩納」または「東恩納」と呼ばれていた。しかし、『石川市史』によれば東恩納地名は恩納間切が成立する以前からあつたとされている。それは恩納間切成立以前、1581年に王府から東恩納ノ口に下りた辞令が伝わるという。

## 戦後の東恩納

終戦直後、米軍政府により石川に置かれていた諮詢委員会が1946年2月に東恩納に移転し、4月には軍政府より志喜屋孝信に知事の辞令が交付され、この東恩納において沖縄民政府が発足した。1950年11月に知念に沖縄群島政府が設立されるまで東恩納は戦後沖縄の行政・経済の中心地となり、出発地となった。

東恩納には、志喜屋知事が宿舍として利用した家屋敷が残る。またこの一帯には、当山正堅、松岡政保、知花高直など沖縄の戦後復興に貢献した方々が住んでいたという(佐次田幸栄氏談・東恩納在・85歳)。

さらに米軍政府教育担当ハンナ博士が、戦後の焼け跡から収集した織物・漆器や陶磁器など沖縄の文化財を保管した東恩納博物館も設置(後に首里博物館へ移転)され、文化面においても戦後の中心地となった。



東恩納博物館跡

昭和20年、沖縄で初めて建設された博物館跡。

## 「恩納」という地名について

「恩納」という地名については、一説に恩納岳の「尾根」、即ち「オネ」↓「オナ」↓「オンナ」という山にちなむ説、また恩納の「オン」は「ウン(海)」の転訛で「ナ」は浜辺で海辺の地を意味するという説がある。

恩納ナビの「恩納岳あがた……」の詩のように恩納村の象徴である恩納岳があり、夏にはビーチで賑わう一帯の浜辺がある。恩納村は山あり、海辺ありの地でどちらの説も条件に合致し、判断が難しい。

## 東恩納の地名について

方位を示す「東」は、沖縄では他に比嘉、比謝とも表記され、ヒガ、ヒジャ、ヒージャなどと発音される。また、「アガリ」というときもある。北中城の比嘉、浜比嘉の比嘉、久米島の比嘉などいずれも東に位置する地にある。東の漢字は一般的には太陽が木の向こうから昇ってくるようすを表す「日十木」を合わせてできた文字といわれている。東恩納は恩納の東方にあつて金武湾から朝日が昇るところに位置する。

戦前生まれの人は、現在でも恩納村恩納のことを「西恩納」と呼ぶこともある。東恩納は、その西恩納に対して「東の恩納」ということになる(ただこの場合のニシは、北のことと解される)。ではなぜ「恩納」という地名になったか、となると東恩納には大きな山や浜辺はなくオンナの意味に合わない。しかし、伝えとして東恩納村の世立て始めは恩納村からきた恩納大主(『石川市史』)とあるから先駆者の名をとって「恩納」と呼んだと考えられる。東恩納は、「東」という位置と「恩納」という先駆者の名をとって付けられたということになる。



石川高原展望台から恩納岳を望む

